Panasonic

P-1 Grand Prix 2023 P-1

QOLリフォームよりすぐり ⑨

広告

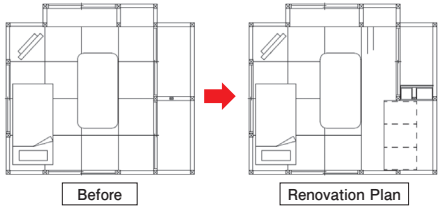
『みんなの居場所』――家族と過ごしてBPSDの改善

「P-1グランプリ」。それはリフォーム実績年間2万件以上を誇るパナソニックエイジフリーの社員が、「プランニング力」「プレゼン力」を競い合う、年に1度の社内コンテストだ。2001年から始まり、毎年開催されている。今回はパナソニックエイジフリー中国リフォーム課の住環境プランナー栗本智弘さんが手がけた事例を紹介する。

栗本さん

80歳台のTさん（男性）は水彩画家の妻と2人暮らし。10年ほど前に脳梗塞を発症し、その数年後にアルツハイマー型認知症と診断された。要介護1で身体的なまひはなかったが、下肢筋力が低下しており、時折暴言や暴力、抑うつなどのBPSDが現れていた。

介護者である妻から「夫の外出頻度が少なくなってきました。屋外の階段の上り下りが不安になってきたようです」と、ケアマネジャーを通じて栗本さんのもとにリフォームの依頼がきた。訪問してアセスメントすると屋内の段差は現状で問題なしと判断したが、やはり屋外階段は転倒リスクが大きく、妻の介護負担も課題だった。そこで短期目標を「安全な外出動線の確保」と「妻の介護ストレス軽減」とした上で、屋外階段に手すりを設置することに。併せて、介護ベッドを導入し起き上がり動作がより自立できるようにした。



この改修に夫婦ともに満足。するとさらに妻から新たな要望が上がった。TさんのBPSDは妻がTさんのもとを離れようとすると強くなるという。Tさんが一日の大半を過ごす介護ベッドのある和室を、自分もくつろげるようにできないかという相談だった。

栗本さんが2度目のリフォームに向けてアセスメントをすると、和室内は介護ベッドや座卓だけでなく、妻の嫁入り道具など思い出のある品々もあり、妻がくつろぐためのソファーなど新たな家具を入れると動線の確保が難しいことが分かった。

そこで、着目したのが押入れだ。収納量を維持しつつ、妻のくつろぎスペースを確保するために、床下収納のある小上がりを作ることを提案。さらに画家である妻の好みも踏まえて、写真立てなどを飾ることができる棚も提案した。

改修を終えるとTさんの外出を続けるための屋外階段への手すりの設置で不安が解消され、妻の介護負担も見守りに軽減。そして、より大きな変化は、夫婦が一緒に過ごす時間が改修前の約3時間から倍の6時間まで増えたことだ。Tさんの暴言や暴力も少なくなり、円満な時間を楽しんでいたという。

「モニタリングで訪問した時、Tさんはとても落ち着いた様子でした。家族でくつろげる空間を提供できたことで精神的な余裕が生まれ、BPSDやQOLの改善が図れたと思います」と、栗本さんはプランナーとして、ハード面だけでなく、なぜそうなるのかという心の要因を追求していくことの重要性を学ぶことができたと話した。

黒田能隆統括部長は、「ご夫婦が共に落ち着いて居続けられる空間を作ったことで、無理なく目配り気配りができ、BPSDの改善にもつながった良い事例。好きな写真などを飾られていた造作棚は、お客様に寄り添った素晴らしい工夫」と評価した。

改修後

改修前

Nursing Care Products by Panasonic

くらしの中で「できる」ことを増やし、そして、次に「やりたい」ことに向かっていただきたい、そんな思いをシンボルマークにしました。
パナソニックの介護用品で「心身が前向きに、その先に歩みだす」。
私らしくいきいきとしたくらしを実現できる社会を創ること
それが私たちの存在意義です。

パナソニック エイジフリー
エイジフリーショップ
お問い合わせ先：営業企画部　06-6908-8122